

# 呼 格 に つ い て

千葉 萌 一 郎

古代ロシア語において格は、現代ロシア語のそれと異なり7格あった。つまり、呼格が余計にあった。呼格は子音語幹名詞を除き男性名詞、女性名詞とも単数においてのみ現れ、双数、複数にあっては主格と一致していた。しかしながら中性名詞単数、双数、複数においては、主格、対格、呼格がそれぞれ一致していた。

もっとも呼格は「呼びかけを表わすもので、真の意味での格とは言い難い。之は文の中にあっても、文より独立したものであって、文の他の部分とは本質的に構成上関係がない。」と、高津春繁氏は「印欧語比較文法」の中で述べている。又 M. A. Соколова は「呼びかけの形態は格と名付けるにはふさわしくない。なぜならそのための十分な根拠がないからである。呼びかけの形態は統辞上存在するが、それは文の構成上任意の他の成分に従属関係をもつ文の成文ではない。従ってこのような理由によって現代文語において呼びかけの語は、コンマ、又は感嘆符によって分離されている」「のみならず格は、形態的には語尾によって示されるが、呼びかけの形態は特別の語尾をもたず語幹その物である。最も明瞭に観察されるものに -ŭ, -ĭ 語幹名詞があって、それらの呼びかけの形態は сыну, гости, господи である。多少とも複雑な様相を呈しているのに -ŏ, -ā 語幹名詞があるが、それは e(o||e) ならびに o(a||o) の母音交替があることによる」として、呼格を格として認めることに疑問を投げているが、ここでは便宜上従来の慣習に従って格ということにしておく。

今それぞれの語幹母音により例をあげれば次のようになる。

-ŏ 語幹	вълкъ	>	вълче
-jŏ 語幹	конь	>	коню
-ŭ 語幹	сынъ	>	сыну
-ā 語幹	сестра	>	сестро
-jā 語幹	земля	>	земле
-ĭ 語幹	кость	>	кости

次に国有名詞の例をあげる。

Иванъ	>	Иване
Игорь	>	Игорю
Василий	>	Василие
Марфа	>	Марфо

但し、語幹母音直前に硬 г, к, х をもった名詞においては第1次軟化を生じた。

другъ	>	друже
отрокъ	>	отроче
духъ	>	душе

又かつてそれぞれ硬 к, г をもっていた отьць, кънязь は次の形態をとった。

отьць	>	отьче
кънязь	>	кънязе

なお -jǫ 語幹呼格は -ǫ 語幹の影響のもとに生じた。

呼格の例として 1147 年 Суздаль の князь Юрий Долгорукий が Игорь Святославич の父 Чернигов の князь Святослав に向って述べた言葉をあげる。

Приди ко мнѣ, брате, въ Московѣ.

スラブ語における呼格の部分的消滅は、共通スラブ語進行過程の中での現象であるが、それがやがて東スラブ語全体を捉えてしまうことになる。

ロシア語においては古来より呼びかけの言葉として、呼格同様主格が屢々使用されていたが、時とともに呼格は主格に駆逐されていく運命を担った。この駆逐がいつ、どこで開始されたか詳らかでないが、呼格の主格による交替はすでに共通スラブ語期に関わりがあった。すでに Остромирово евангелие において、稀ではあるが呼格に代る主格の使用例が認められる。А. И. Соболевский の指摘によれば Марѣа, Марѣа, печешиса 又 Зографское евангелие からの горе тебѣ, Хоразинѣ, горе тебѣ, Витѣсаида がある。南方ロシア語文献 Остромирово евангелие 及び 1073 年, 1076 年の Изборники においては、呼格の後退はごく稀にしか認められなかった。又 Слово о полку Игореве において呼格は、様々な名詞に広く積極的に使用されている。ここでは 40 例以上の使用例があるので、その主なるものをあげると以下ようになる, братие и дружино; о, Бояне, соловию старого времени; ты, Игорю; сѣдлай, брате; о, русская земле; ни тебѣ... поганьи половчине; туре Всеволоде; уже, княже; ты, буи Рюриче и Всеволоде; о, вѣтрѣ; о, Днепре Словутицю; о, Донче。

しかしながら А. И. Соболевский は、13 世紀から 14 世紀にいたる北方ロシアの古文書においては、呼格の主格による交替は稀ではなかったことを認め、14 世紀大ロシア語方言においてはすでに、呼格の意味における主格による交替が支配的であったとしても、ある種の語の古い呼格形は疑もなく未だ充分に使用されていたとして、господине, княже, сыну... をあげ、これらの語は 14 世紀以降も屢々見出されると述べている。

Ф. П. Филин は、12 世紀から 15 世紀にわたる Новгород 古文書の中で господа 形態による呼格形が 5 たび見出されているということ、又 Задонщина と Слово о полку Игореве を比較して、Задонщина には古い形態の呼格が一定の狭い範囲の語彙、即ち брате, господине, Доне, брате Пересвете, господи, боже に限って使用されているということ、更に、呼びかけを意味する名詞はすべて上記の名詞を除いては主格形が使用されている事実を引用している。ちなみに Задонщина は Слово о полку Игореве に比べて、およそ 200 年ほど遅れて書かれているばかりでなく、ロシア北東部において記されたことに重要な意味があると思われる。更に Ф. П. Филин は 14 世紀末から 16 世紀初頭にかけてのロシア北東部の社会経済史関係文書において、呼格は若干名の人、つまり複数の意味における呼かけの際に、個々の名前についてのみ保持されていたということ、即ち И судьи спросили: де тот Гридка ракуля? — И Давыдко так рек: тот, господине, Гридка умерль 及び 15 世紀から 16 世紀にかけての写本 Хождения игумена Даниила において、呼格は語彙の面で極めて限定されており、通常教会関係文章の抜粋にあたる個所とか、該当古文書にとり特徴的な特別の用語法の場合にのみ認められたことを引用している。

ここで見落せない事実として、文章語と民衆語との相関関係がある。民衆語の中にはすくなく教会スラブ語関係の文書からの浸透があったであろうし、あれば当然その影響を蒙ったであろうことは想像に難くない。呼格についても同様のことが言えるであろう。ロシア北東部において呼格が消滅していくには、およそ数百年を要した。12 世紀から 16 世紀に渡るロシア

北東部に現れた古文書中の限定された語彙、その文体的ニュアンスは、北東部の人々の中でたとえ呼格が保持されていたとしても、特定の言語状況における名詞においてであることは明白である。そのような呼格の使用は、文章語により側面からの支持を受けていたと考えられる。しかしながら、南西部においては北東部と異なり、呼格は生けるカテゴリーであったし、今なお保持されている。

前述の呼格の主格による交替は、又その反対の過程、即ち呼格が主格を表示し得たことを伴っていた。学者はかなり早い時期に、古代ロシア語文献、特に、Новгород, Псков に関わるものに、次の形態があることに注意を向けた、загорѣса Савѣкине дворе (Новгородская Синодальная летопись, 約 1194 年), а останьке разидеса (同様, 約 1215 年)。А. И. Соболевский は、このような現象を主格の意味における呼格の使用と理解した。彼は Новгород 及び Северодвина 古文献に相当数の用例を発見している、вдале Варламе (Хутынская грамота, 約 1192 年), Юрьѣ Володимѣричь, Юрьѣ сѣде (Новгородская кормчая, 1282 年), Завке ста на судѣ, Савке рче, Смене Ночине имале (Двинская Рядная, 14 世紀から 15 世紀)。又 12 世紀から 14 世紀にわたる古文献で、Новгород に属さないものには男性名詞において主格の代りに呼格が使用されているが、それは殆んど例外なく固有名詞であり、その数も極めて限られていると報じている。

А. А. Шахматов は、主格の意味における呼格は他のスラブ諸語、特に、セルボクロアチヤ語に知られているとし、又古代ロシア語文献からは多くの例をあげている、Олександро, Лестько, Данило, Гаврило 等。

16 世紀中葉には、呼格は明らかに現用語から遠ざかっていく。当時のロシア北西部公用文書の若干に次のような例が認められる。Пожалуйте, господине пасадники и ратманы...; И судьи вспросили Якова и его товарищев: Скажите, брате, ...

しかしながらモスクワ及び他の地域に関わる 17 世紀中葉の文書には、господине 形態はまだ屢々見受けられる。もっともモスクワにおいてはそれ以前に、呼格の主格による駆逐は終っていたと言えるのであるが。И мы, господине, ханова человѣка отпустили; с Бѣла озера послал я к тебе, господине, пристава.

もしも間投詞として使用されていて、明らかに教会スラブ語に関わる боже, господи の 2 語を数えないとするならば、現代ロシア語に呼格は何等その痕跡を留め得なかったかも知れない。しかしながら呼格はまだ 18 世紀の作家に使用されていた。П. Я. Черных の引用によれば Кантемир に молчи, уме, не скучай; что так смутен, друже мой; музо, не пора ли. Пушкин に отпусти ты, старче, меня в море がある。方言、特に民間伝承には呼格の痕跡がかなり多い。例えば Онега 物語詩において Ай же ты, ратаю, ратаюшко!; Пришел, ввалился, князю, засельщина; Что, Василие, стучался, Александрович, колотился? なお Новгород や、一般に北西部ならびにシベリア地方の話し言葉の中に呼格 -o がある。мамо, бабо, девко, дево, Окулино, Манько, Гришо。時にはアクセントをもって сястрó, Ванькó となったり、大声での呼びかけの際には нянькоў, Ванькоў となったりする。П. Я. Черных は、シベリアにおける дево が男性に対する парня<парень と同様に、年齢に関わりなく任意の女性に向けられていることを興味深く述べている。他に 1787 年の Ежемесячные сочинения の Роспись слов и речений в Двинской стране に、間投詞 спож<госпоже 及び Даль による барте<брате があるという。

А. А. Шахматов によれば、北方ロシア語方言ならびに南方ロシア語方言の若干の方言に、

新しいタイプの呼格形が見られるという。мам<мама, баб, девуш<девушка, ребят<ребята, Вань, Дунь, Саш. この形態は新しい出現であり, その発生は明らかにアクセントの落ちない語末母音が弱化して脱落したと思われる。

ウクライナ語及び白ロシア語においては一般的に, 呼格は文語においても口語においても保持されて今日にいたっている。ウクライナ語では чоловіче, батьку, коню, сину, жінко, земле. 白ロシア語では брация, сынку, дружа.

以上東スラブ語方言において, 味格が消滅するにいたった過程を辿ってみたが, それにはたとえ解明できない幾つかの要因があるにしても, 基本的には中性名詞や, 呼格形が常に主格と一致している双数形, 複数形名詞が, 呼格形を圧迫し相互の間に混乱を生みながらやがては主格の中に統一していったことは明らかである。一体, 人は混乱を経ることなしには, 新しい創造をなし得ないものであろうか。

### 参 考 文 献

- Борковский В.И. и Кузнецов П.С. Историческая грамматика русского языка. М., Изд-во АН СССР, 1963.
- Букатевич Н.И. и др. Историческая грамматика русского языка. Киев, “Вища школа”. 1974.
- Марков В.М. Историческая грамматика русского языка. Именное склонение. М., “Высшая школа”, 1974.
- Соколова М.А. Очерки по исторической грамматике русского языка. Л., Изд-во ленингр. ун-та, 1962.
- Филин Ф.П. Происхождение русского, украинского и белорусского языков. Л., “Наука”, 1972.
- Фортунатов Ф.Ф. Избранные труды. т. 2. М., Учпедгиз, 1957.
- Черных П.Я. Историческая грамматика русского языка. М., Учпедгиз, 1954.
- Шахматов А.А. Историческая морфология русского языка. М., Учпедгиз, 1957.
- 高津春繁著, 印欧語比較文法, 岩波書店, 1967年.